

菊池寛『真珠夫人』における〈宿命の女〉

——瑠璃子の人物造型を中心に——

荒 屋 愛 莉

はじめに

『真珠夫人』は菊池寛が『東京日日新聞』及び『大阪毎日新聞』に一九二〇年の六月九日から十二月二十二日まで連載した菊池にとつて初となる新聞連載小説である。『真珠夫人』の連載は成功し、劇化もされ、それまでは文壇にのみ知られていた菊池の名を世間一般に浸透させる作品となった。

『真珠夫人』のあらすじはこうである。真珠のように美しい男爵令嬢唐沢瑠璃子は船成金庄田勝平により恋人の杉野と別れ、金権の権化である勝平に復讐するために勝平と結婚する。勝平への復讐は一応勝平の死という形で幕を閉じるが、物語後半で瑠璃子は今度は女性を軽視する世の男性や社会への復讐のため男性を弄んでゆく。

物語の後半瑠璃子は処女らしい清らかさを捨て、世の不平等を訴えるために男性を自宅のサロンに招き、気のあるふりをして弄ぶ。

その間に瑠璃子は二人の青年、青木淳と青木稔を破滅へと導き、物語の最後には瑠璃子に弄ばれた稔によって彼女自身も死という破滅へ向かってしまう。しかし、瑠璃子は男性には冷たい心で残酷な行

為を繰り返すが、勝平の娘の美奈子には優しい母として振る舞い続ける。瑠璃子の少女らしさや美奈子へ愛情をそそぐ姿に見える彼女の優しい性格とは相反する行動を、物語の後半で出会う男性にとつていことになる。なぜ彼女は青木兄弟に対するような非情な行いをするのだろうか。

第一章では、まず瑠璃子がこれまでの研究でどのように捉えられてきたのかを見る。第二章では、瑠璃子の人物造型を明確にしている上で『真珠夫人』本文に描写のある外国文学、特に『ユーディット』『カルメン』そしてオスカー・ワイルドなどに登場する〈宿命の女〉と呼ばれる女性像に注目して瑠璃子との比較検討を行う。そして第三章では、『真珠夫人』執筆当時の文壇における性規範をめぐる議論と瑠璃子の発言や行動を照らし合わせ、菊池が彼女にどのような主張を持たせたのかを検討し、瑠璃子の人物造型を明らかにしていく。

一 先行研究における瑠璃子の評価

『真珠夫人』は同時代には通俗小説という枠の中での評価が中心だった。松岡譲^一は『真珠夫人』を「通俗小説一般のレヴェルからいつて上位にあるものだ」とし、青野季吉^二は私小説的写真と絶縁してしまっているために通俗小説化していると指摘した。

しかしこの通俗小説としての評価傾向は前田愛が瑠璃子に四つの女性像を見出して以後、瑠璃子の人物造形と『真珠夫人』のプロットの破綻という二点に焦点を移して行つた。前田愛^三は瑠璃子に「清純な美少女」(復讐を誓うユーディット)、「娼婦型の傲慢な未亡人」(継娘を庇護する未亡人)という四つの女性像の要素を見出し、一人の人物に要素を詰め込み過ぎたため長編小説としてのまとまりが失われていることを論じた。また瑠璃子の人物造形の点で前田は、瑠璃子の復讐の動機が莊田勝平個人では無く社会悪への挑戦となっている点に瑠璃子の新しさを肯定している。しかし、物語の結末近くでは「母」「処女」としての役割が強調されることで瑠璃子の新しさは相殺されていると批判的に捉えた。

瑠璃子の新しさという点では前田以前に川端康成^四も瑠璃子は処女を守り通し初恋の人に抱かれて死んでゆく点と美奈子を愛し初恋を大事に思つてやる点に菊池は読者に同情を求めており、新しい女としては不徹底であり矛盾があると述べていた。

この瑠璃子は新しい女としては不徹底であるという川端、前田の論を受けて駒尺喜美^五は、瑠璃子は自己の身をもつて主張した女であり、古い道徳を打ち破り男と対等であることを主張する確かな思想を持っていることから彼女に新しさを認めた。

さらに西垣勤^六も瑠璃子の男権への復讐を社会一般と個人とを混同した間違つた復讐としつつも男性中心社会の不当さを衝いており、この瑠璃子の考えは「必ずしも当時常識とされる考え方ではないだろう」と瑠璃子の新しさを一部認めている。

陳月吾、唐麗燕^七は川端の論を受けて、瑠璃子に現れた人間的な善性は少しも新しい女としての造形と矛盾しないとし、処女を生涯守り通すという設定は古い貞操観念の現れというよりむしろ初恋の人に対する心と肉体の操を守りながら、初恋を踏みにじられた恨みを多くの男性に報いるという恋愛至上主義の変形として取るべきだと分析した。

これまでの研究史の中で瑠璃子という人物を見ていくと彼女に新しさを認めるか否かという点が『真珠夫人』研究の一個の争点になつてきたことが分かる。しかし、これまでの研究では陳月吾や唐麗燕が問題にしている貞操というもののような言説空間で『真珠夫人』とかかわりがあるのかは十分に検討されていない。また、瑠璃子の男を次々と弄んで行く姿からは当時流行した「宿命の女」モチーフを連想させるが瑠璃子と「宿命の女」モチーフとの関連はこれまで指摘されてこなかった。そこで本稿では、瑠璃子の人物造形について同時代の最新の女性をめぐる関わりや「宿命の女」というモチーフとの関わりから再検討していきたい。

二 『真珠夫人』における「宿命の女」

瑠璃子の人物造型を明らかにしていく上で、『真珠夫人』に登場する『ユーディット』『カルメン』『オスカール・ワイルド』に注目する。

『ユーディット』と『カルメン』には「宿命の女」と呼ばれる女性像が描かれており、またオスカー・ワイルドの代表作『サロメ』（一八九一年）の主人公サロメも「宿命の女」の代表的な一人とされてきた。この三つの文学はいずれも瑠璃子の発言の中に登場しており、瑠璃子と重なる形で描かれている。瑠璃子を、『ユーディット』『カルメン』『オスカー・ワイルドの三つの文学に共通する「宿命の女」女性像の観点から比較検討し、瑠璃子の人物造型を明らかにしていく。

二一 「宿命の女」

「宿命の女」(femme fatale)は十九世紀後半のヨーロッパ、特にフランスで盛んに取り上げられた、男性を破滅へ導くような魅力を持つ女性像のことである。渡辺義愛^八によれば、「宿命の女」型の女は神話や文学、絵画作品にも見られるがジョン・キーツの「つれなき美女」(一八一九年)をその原点とし以後、退廃的な風潮のなか世紀末にむかつて開花していった。カール・ウツドリントク^九は「宿命の女」という語が初めて登場したのは一八七二年にベルナルディーノ・ルーイーニの絵画『サロメ』をテオフィル・ゴーチエが『femme fatale』と表現したことからだとして述べている。マリオ・プラターツ^{一〇}は、無数に存在する「宿命の女」をブロスベル・メリメのカルメンのように奔放で肉感的なタイプとギュスターヴ・フロベールのサランボーのように冷やかなタイプの二種類に分類している。しかし、今日まで正確に「宿命の女」の系譜を記したもののや定義などは定まっていまいとされている^{一一}。

ヨーロッパで流行した「宿命の女」像は日本に翻訳を通して輸入された。平石典子^三は日本に最初に「宿命の女」を紹介したのは上田敏の美文集『みをつくし』(一九〇一年)だったと分析している。『みをつくし』は発表当時文壇からはほとんど無視をされたが、『みをつくし』の中のガブリエーレ・ダヌンツィオやギ・ド・モーパッサンの作品にはそれまで見られなかったような女が描かれていた。また、日本での「宿命の女」の流行という点では中村圭子^三がオスカー・ワイルドの『サロメ』(一八九一年)がオーブリー・ビアズレーの挿絵をともなつて日本に紹介されるや、当時の文学青年や画家や美術学生たちをたちまちとりこにした、と論じている。

「宿命の女」という女性像はやがて日本においても文学作品の中に取り込まれていった。特に夏目漱石や谷崎潤一郎の作品に登場する女性はい今日の研究で日本における「宿命の女」として分析されている。たとえば、『草枕』(一九〇六年)に登場する那美さんは漱石が展覧会で見たラファエル前派のジョン・エヴァレット・ミレーの有名な絵「オフエーリア」と重ねて描写されており「宿命の女」との関連が研究されてきた^{一四}。谷崎の文学に登場する女性たち、春琴やお遊様などは、日常に存在するのではなく日常生活から乖離し、永遠のイメージとして結晶する姿に「宿命の女」が見られてきた^{一五}。しかし、今日「宿命の女」として語られている明治・大正期の女性について同時代の評価を見ても管見の限り「宿命の女」という表現自体は全く使用されていない。恐らく、『みをつくし』以降今日「宿命の女」と言われる女性像は「男を破滅に導くような魅力をもつ女性」というこれまで日本では見られなかった魅力的なモチーフとして当時流行し、盛んに取り上げられたが、その女性像に「宿命の女」

というはつきりとした名称がついたのは昭和以降の事だったと思われる。確認した中では坂口安吾が一九二一年十一月に『我が人生観』の六節で「宿命の女」という語を用いているのが日本において比較的早いものである。そこで本稿では、明治以降外国から翻訳を通して日本に輸入された「男を破滅させるような魅力をもつ女性」のイメージを指す概念として「宿命の女」という語を使用して行くことにする。

二―二 瑠璃子と「宿命の女」概念との分離

第一節では「宿命の女」を「男を破滅させるような魅力をもつ女性」と定義した。この定義は「宿命の女」という女性像が持つ細かな特色や系譜は踏まえない大掴みなものだが、「宿命の女」イメージの最も中心的な要素を抽出したものである。この定義と瑠璃子を照らし合わせてみると、瑠璃子は青木兄弟を自身の魅力によって破滅させている。この瑠璃子の姿は「男を破滅させるような魅力をもつ女性」という「宿命の女」と重なる。これまでの『真珠夫人』研究において瑠璃子は第一章で述べた通り「新しい女」として認めるか否かという点から主に検討されてきたが、瑠璃子と「宿命の女」との関わりは語られてこなかった。なぜこれまでの研究の中で瑠璃子と「宿命の女」概念は結びついてこなかったのだろうか。

このことを考えるためにまずは、菊池の文学の特徴について同時代の作家の捉え方を見ていく。菊池と二高時代の同級生であり、『新潮』の同人仲間であつた芥川はこのように述べている。

菊池寛の感想を集めた「文芸春秋」の中に、「現代の作家は何人でも人道主義を持つてゐる。同時に何人でもリアリストたゞる作家はない。」と云ふ意味を述べた一節がある。現代の作家は彼の云ふ通り大抵この傾向があるのに相違ない。しかし現代の作家の中でも、最もこの傾向の著しいものは、実に菊池寛自身である。彼は作家生涯を始めた頃、イゴイズムの作家と云ふ貼り札を受けた。彼が到る所にイゴイズムを見たのは、勿論このリアリズムの裏書きを与へるものであらう。が、彼をしてリアリストたらしめたものは、明らかに道德的意識の力である。砂の上に建てられた旧道德を壊つて、巖の上に新道德を築かんとした内部の要求の力である。私は以前彼と共に、善とか美とか云ふ議論をした時、かう云つた彼の風貌を未だはつきりと覚えてゐる。「そりや君、善は美よりも重大だね。僕には何と云つても重大だね。」―善は彼にとつては、美よりも重大なものであつた。一六

芥川は菊池を道德主義に基づいた「リアリスト」であり、「美より「善」を重んじる作家であつたと述べている。また、正宗白鳥は菊池を「現代を背負つた」作家であると述べている。

菊池君を論ずるのは現代を論ずることである。この雑多紛々の現代に於て、ある一人を以て現代の標本とすることは困難であつて、範圍を文壇に限つても、現代を背負つた標本的人物はそこらに散在してゐるやうであつて、特に一人を選び出すことは困難である。しかし、今日の私は、多くの躊躇するところな

く、菊池君をもつて好箇の現代の代表者としようと思つてゐる。私は彼に於てよく現代の影を見てゐる。^{二七}

このように菊池は同時代の文壇からは「リアリスト」であり「現代を論ずる」作家であるとされていた。「美」よりも「善」を重んじるという評価は、菊池の「生活第一、芸術第二^{二八}」という信条に通じている。菊池の中で「美」というものの優先順位が実生活において大切にされる「善」よりも意識的に下げられているものだとこのことを察することができよう。

日本において「宿命の女」が文学に描かれた代表として、一節で漱石と谷崎の作品を例に出した。漱石と谷崎の作品に登場する女性が今日「宿命の女」として語られるのに対して、菊池の描く瑠璃子が「宿命の女」として語られないのは菊池のこの現実主義が原因ではないだろうか。漱石と谷崎の文学について菊池自身このようなことを述べている。

漱石先生の作品には現実其儘を描いたものは殆どないやうです。現実には皮被かせたものが多いやうです。現実には皮被せたものの、即ち芸術といふやうな気がします。芸術化されたものが結局長く残るといふやうな気がします。、（略）漱石先生や谷崎潤一郎氏の作品は現実をそのまま描いていないから——皮被せてゐるから、即ち芸術化されてゐるからいゝでせう。^{二九}

漱石や谷崎の作品は「現実には皮被せ」ているので「芸術化」されている。現実主義者として作品に現実を描く菊池と漱石たちの根

本的な文学に対する姿勢の違いが窺える。

また、瑠璃子の描写を見ると、視点人物が渥美信一郎である女王蜘蛛の章までは瑠璃子の正体が分からず、瑠璃子は神秘的な女性と言えなくもない。しかし、物語の後半は視点人物が瑠璃子となり、彼女の思考が読者に見えてしまう。それゆえに幻想的なイメージとつながる「宿命の女」と瑠璃子はこれまで結びつかなかったのではないだろうか。

しかし、本作の中で菊池は、ユーディット^{三〇}やカルメン^{三一}、今日代表的な「宿命の女」の一人であるサロメ^{三二}を描いたワイルドのイメージを瑠璃子に使おうとしている。このことから見える瑠璃子の「宿命の女」性について次節から検討していく。

二―三 フリードリヒ・ヘッベル『ユーディット』

本作の九章タイトル「ユーヂット」とは旧約聖書外伝^{三三}の「ユディット」に登場する女性のことである。このユーディットという女性は今ままで絵画や小説などに男を破滅させる女として旧約聖書外伝以後、くり返し題材とされてきた^{三四}。勝平の妻になることを決意した瑠璃子が結婚に反対する父親を説得する発言の中で「ユーヂット」は登場する。

「左様でございます。妾はユーヂットにならうと思ふのでございます。ユーヂットと申しますのは猶太の美しい娘の名でございます。」

「その娘にならうと云ふのは、どう意味なのだ！」父は、激し

い興奮から覚めて、やゝ落着いた口調になつてゐた。

「ユーヂツトにならうと申しますのは、妾の方から進んで、あの莊田勝平の妻にならうと云ふことでございます。」

『真珠夫人』本文「ユーヂツト」第七節より

瑠璃子は勝平と結婚する自分を「ユーヂツト」と重ねている。「ユデイト記」は以下のような内容である。アッシリヤ王ネブカデネザルは、メディア王との戦いで戦鬪に参加しなかつた国々に報復するため、アッシリヤ軍総司令官ホロフェルネスをそれらの国に遣わした。ベトリアという町が水源を抑えられ、降伏を迫られたとき、その町に住む信仰深く美しい寡婦ユデイトは一人の女奴隷とともにホロフェルネスのもとに向かつた。ホロフェルネスはユデイトの知恵と美貌に夢中になり宴の席に彼女を招いた。やがて部下たちは次々に帰り、ユデイトだけが残された。ユデイトは葡萄酒を飲み過ぎて寝台で眠っているホロフェルネスの首をとり、街へと帰つた。それによつて司令官を失つたアッシリヤ軍は敗走した。この旧約聖書外伝における「ユデイト記」と瑠璃子の語る「ユーヂツト」には大きな相違点がある。

「お父様、昔猶太のベトウリヤと云ふ都市が、ホロフェルネスと云ふ恐ろしい敵の猛将に、囲まれた時がありました。ホロフェルネスは、獅子を搏にするやうな猛将でした。ベトウリヤの運命は迫りました。破壊と虐殺とが、目前に在りました。その時に、美しい少女が、ベトウリヤ第一の美しい少女、侍女をたつた一人連れた切りで、羅衣を纏つたのです。そしてこの少女

の、容色に魅せられた敵將を、閨中でたつた一突きに刺し殺したのです。美しい少女は、自分の貞操を犠牲にして、幾万の同胞の命と貞操とを救つたのです。その少女の名こそ、今申し上げたユーヂツトなのでございます。」

『真珠夫人』本文「ユーヂツト」第七節より

瑠璃子の語る「ユーヂツト」は貞操を犠牲にしてホロフェルネスを刺し殺している。しかし、先に見た「ユデイト記」では貞操を犠牲にすることなく、酔つて寝ているホロフェルネスの首を落としている。この相違から川上美奈子^五は、菊池が参照したのは吹田蘆風訳のフリードリッヒ・ヘッベル『ユデイト』(一九一四年)である可能性が高いとしている。ヘッベル版では瑠璃子の語る「ユーヂツト」と同じように貞操を犠牲にしてホロフェルネスの首を落としている。ヘッベルは当時の文壇で盛んに受容されており、芥川も評論の中でヘッベルの名前を出している。

長興善郎も本年度に於て、特に文壇の視聴を惹くべき作品は、遂に発表する事がなかつたらしい。が、氏の単等鐵門に迫るが如き努力は、懈怠なく続けられてあるやうである。善郎氏は決して一般批評家が考へてゐるが如く、無器用一点張りの作家ではない。氏の精進にして頓挫しなかつたなら、案外速くヘッベルを想はせるやうな、力強い戯曲なり小説なりが出現しないものもあるまいと思ふ^六

芥川は、長興善郎を評する際、ヘッベルの名を出している。また、

同じく長与善郎の戯曲『項羽と劉邦』（一九一七年）の匿名の同時代評でも、この作品にはヘッベルの『ユーディット』を思わせるものがあると指摘されている。

成程『項羽と劉邦』には種々の欠点があるといへばある、豊富なる史的材料から戯曲的珠玉のみが選択されてゐない、結構上に可成な不用意がある。白はまだ十分に板に載つてゐない、劉邦や其他の付属人物には殊に性格描写の不徹底がある、中心人物を二つに取らうとした所に劇の全的效果を弱からしむる恨がある。数へ来れば其技巧上の欠点は可成少くないが、自ら運命を嘲りて之と戦ひつゝ、遂に運命の弄ぶに終る力の巨人項羽を生まんとする力と熱とは、宛然ヘッベルのユーディットを思はしむるものあり、真摯なる努力、真に敬服に値するものがある

二七

ヘッベルは『真珠夫人』が執筆される頃にはすでに日本の文壇に名が知られており、彼の代表作である『ユーディット』も受容されていたことがわかる。ヘッベル作を菊池が参照したのではないかという川上の論は、菊池自身が『真珠夫人』を執筆した一九二〇年の六月に「最近ではヘッベルの作が好きである。殊に『ユーデット』などはいゝと思ふ^{二八}」と述べていることから、ほぼ間違いないだろうと思われる。ただ、菊池が吹田蘆風訳を参照したのではないかという点については、吹田と同じく板垣邦器が同じ年にヘッベルの『ユーディット』を翻訳・出版していることから菊池が参照したのが吹田訳であると断定することはできない。だが、吹田訳は出版時

に『朝日新聞』などに広告が掲載され^{二九}、『時事新報』^{三〇}や『万朝報』^{三一}などの紙面上で評価がされていることから、より世間に普及していたものと考えられる。

貞操を犠牲にしたヘッベルのユーディットと貞操を守り抜く瑠璃子の間には大きな相違もある。しかし、自身の魅力によつて勝平とその息子の莊田勝彦を魅了し、勝彦を介して勝平を死に導いた瑠璃子は「容色」によりホロフェルネスを誘惑し、死という破壊へと導いたユーディットのなしたことをなぞるかのようになっている。菊池自身が「宿命の女」という語を使用していない事から、彼がその言葉を意識して瑠璃子を描こうとしたとまでは言えないが、勝平と戦う瑠璃子を「宿命の女」であるユーディットと重なる形で描いていることは、瑠璃子の人物造型を考える上で重要な点であろう。

二一四 プロスペル・メリメ『カルメン』

『カルメン』（一八四五年）は渥美と瑠璃子の会話の中に登場する。好きな仏蘭西文学は何か、と聞かれた瑠璃子はアナトール・フランスやオクターヴ・ミルボーなどの名前を出しながらも、プロスペル・メリメの代表作『カルメン』の女主人公カルメンについて強く語る。

「あの女主人公を何うお考へになります。」

「好きでございますよ。」

言下にさう答へながら、夫人は嫣然と笑つた。

「妾さう思ひますのよ。女に捨てられて、女を殺すなんて、本当に男性の暴虐だと思ひますの。大抵の男性は、女性から女性

へと心を移してゐながら、平然と済ましてゐますのに、女性が反対に男性から男性へと、心を移すと、直ぐ何とか非難を受けなければなりませんのですね。妾、ホセに刺し殺されるカルメンのことを考へる度毎に、男性の我儘と暴虐とを、憤らずにはゐられないのです。」

『真珠夫人』本文「魅惑」第七節より

瑠璃子はカルメンを殺したドン・ホセの行為を「暴虐」とし、彼の行為を世間一般の男性に置き換えて、男性中心社会における女性の不平等に憤っている。勝平を金権の権化と捉え、彼に向かつていつた瑠璃子に重なるのがユーディットであるならば、本作の後半で、「男性の我儘と暴虐」とに反抗するため男性を弄び、そのために男性に殺される瑠璃子にはカルメンのモチーフがつかわれているのではないだろうか。

『カルメン』は『真珠夫人』に用いられる以前に翻訳が日本において幾つか出版されている。一九二三年に生田長江が翻訳を出版し、一九一五年には菊池の京大時代の恩師である厨川白村も一宮栄とともに『メリメエ傑作集』の中で『カルメン』の翻訳を行っている。当時世間で最も流通していたのは、知名度から考えるに生田長江訳であつたと思われる^三。だが、菊池が『真珠夫人』にカルメンを用いるにあつて、その契機となつたと考えられるのは布施延雄訳の『カルメン』である。布施訳は『真珠夫人』が連載される前年の一九一九年一月に出版されており、出版時には新聞に広告が多数掲載^三された。直接菊池が参照したものがどれかは分からないが、『真珠夫人』執筆と布施訳の出版が近いことから、布施訳の出版に奮起

し、本作に『カルメン』を用いたのではないだろうか。

『カルメン』と本作との関係について先行研究では、小林幹也^{三四}が『真珠夫人』における視点人物の交代は『カルメン』からの影響ではないかと分析をしているが、カルメンが〈宿命の女〉であることのかかりについては『ユーディット』と同じく検討されて来なかった。

『カルメン』もまた、『ユーディット』と同じく〈宿命の女〉として代表的な女性である。鹿島茂^{三五}はカルメンを「猫型のファム・フアタル」であるとし、カルメン型の〈宿命の女〉は男をマイナス無限大の地獄に引き込むが、自分もまた死へと向かつて生きる「宿命」にある、と論じている。『カルメン』の結末カルメンは、彼女から愛されなくなったことに絶望したドン・ホセに小刀で刺殺されてしまふ。瑠璃子も同じように彼女に愛されていないことを知った稔によつて刺殺される。瑠璃子はカルメンと同じように「男性の我儘と暴虐」によつて殺される。この結末から鹿島の論じるカルメン型の〈宿命の女〉に瑠璃子が当てはまっていることは明白であり、菊池が『カルメン』のモチーフを瑠璃子に持たせていることが分かる。

二一五 オскар・ワイルド

本作には〈宿命の女〉を代表する『サロメ』の作家、オскар・ワイルドの言葉も引用されている。それは一九二〇年十二月六日に掲載された「一条の光」第五節で、稔からの求婚を断ろうとする瑠璃子がワイルドの警句を引用している。

「青木さん。貴君が、妾と結婚なさうなんて、それは一時の迷ひです。貴君のお若い心の一時の出来心です。貴君には妾の心が少しも分つてゐないのです。いゝえ、妾の本体が少しも分つてゐないのです。妾の心が、どんなに荒んでゐるかそれが貴君には、少しも分つてゐないのです。妾が、貴君を本当に愛してゐるかどうかさへ、貴君には分らないのです。さう／＼、ワイルドの警句に、『結婚の適當なる基礎は相方の誤解なり。』と云ふ皮肉な言葉がありますが、貴君の妾に対する、結婚申込なんか、本当に貴君の誤解から出てゐるのです。」

『眞珠夫人』本文 二条の光 第五節より

「結婚の適當なる基礎は相方の誤解なり」という警句はワイルドの『アーサー・サヴィル卿の犯罪』（一八九一年）に登場する。瑠璃子は美奈子の初恋の相手に気づき、稔に自分をあきらめさせるため、稔の自分への思いは誤解であると説く。

菊池のワイルド受容は一高時代に本格的に始まり、このときが最も深いものであつたとされている。菊池自身も以下のように述べている。

最も早く自分を囚へ、動かし、青年期の情熱をそれに傾けしめたものは、作家としてはオスカー・ワイルドであり、作品としては就中彼の『ドリアン・グレーの肖像』であつた。自分は今ワイルドの名を言ふに当たつて、当時の自分が、あの作中のヘンリー郷の耽美主義的主張に共鳴し、採つて以つて自分の主張の如くに主張したことを回想し、禁じ得ざる微笑を私に口

辺に覚える。三六

一高時代に外国作品を本格的に読み始めた菊池が最初に情熱を持つて熟読したのはオスカー・ワイルド『ドリアングレイの肖像』であつた。今日では現実主義者といわれる菊池も若い頃には耽美主義に深く「共鳴」に「主張」していた。菊池のワイルド受容について片山宏行^{三七}はこう論じる。

大正二年十一月九日の『萬朝報』に懸賞小説の当選作として発表された菊池の「禁断の木の実」は、宗教学校のなかで生活する青年たちの自我の目覚めと動揺を描こうとした作品で、主題としては明らかにイブセンを意識しているが、自我に目覚め背徳的な行為に走る松田という青年と、この松田から自分の信仰を嘲笑され、懷疑心の芽生えに苦悩する吉田という青年の取り合わせは、ヘンリー郷によつてくりかえし享樂的思想を吹き込まれ、次第に人格を墮落させ破滅してゆく美貌の青年を描いた『ドリアン・グレーの画像』の場合に類似している。菊池はその後、この作品の舞台を一高の寮生活に移して書き改め、「落ち行く人」と題して大正七年四月の『雄弁』（春季増刊号）に再度発表しているが、今度はクリスチャンの厳格な家庭に育てられた相馬秀夫という美しい容貌を持った模範学生が、ワイルドを奉じ享樂的な学生生活を謳歌する山岡という学生によつて、そのストイックな生活を批判されるうち、自分の生き方に許瞞的なものを感じはじめ、ついには毎夜のごとく歓樂街に身を投ずるまでに落ちて行くという筋書きに改め、前にはなかった主

人公の破局まで付加するなど、「ドリアン・グレーの画像」を意識していることがいっそう明瞭になっている。

片山によれば、菊池の初期作品『禁断の木の实』には明らかな「ドリアン・グレーの画像^{三八}」の影響が窺え、七年後に題名を変え、「落ち行く人」として再度掲載した際にはさらに「ドリアン・グレーの画像」意識が強くなっている。このように初期の菊池が耽美主義に傾倒していたことは先行論でも取り扱われているが、ではリアリストとしての菊池はどの時期から始まるのだろうか。これについても同じく片山が菊池の経済的な逼迫や自身の顔に対するコンプレックス、そして一高退学の原因となったマント事件^{三九}を経て深く現実と対面していくことから次第に菊池の文学からうすくなっていた、と論じている。菊池の現実主義は根づからのものではなく、耽美主義の一面をその内面に併せ持った現実主義だった、と言えるだろう。現実と対面することで耽美主義から離れて行った菊池からは自然とワイルド受容も薄れて行ったが、再びワイルドに向き合う時がやって来る。その契機として天佑社の『オスカー・ワイルド全集』の出版が挙げられる。この全集は天佑社から一九二〇年四月から九月まで全五巻で出版されており、矢口達や本間久雄などが翻訳・編集に関わった。日本における最初のワイルド全集で、当時外国人作家の全集が未だ少なかった時期に出版され、話題となった。『真珠夫人』連載と同時期にこの『オスカー・ワイルド全集』は発行されており、菊池がこの『オスカー・ワイルド全集』に触発されて、『真珠夫人』にワイルドの警句を引用したということは十分に考えられることである。『真珠夫人』にワイルドの警句が引用されたのは一九二〇年一

二月六日のことで『アーサー・サヴィル卿の犯罪』が収録された『オスカー・ワイルド全集一』は一九二〇年の六月に出版されている。また、代表的な〈宿命の女〉である『サロメ』が収録された『オスカー・ワイルド全集二』も四月に発行されており、菊池がワイルド全集によって内面に潜めていた耽美主義を思い起こし、『真珠夫人』にもそれが現れたと考えることは不自然ではないだろう。

先にも触れたように、オスカー・ワイルドの著作にはユーディット、カルメンと並んで有名な〈宿命の女〉の登場する『サロメ』がある。『サロメ』のあらすじは以下のようなものである。ユダヤのヘロデ王の誕生日、サロメはヘロデの視線に嫌気がさし、外に出た。すると井戸から幽閉されている占い師ヨハネの声が聞こえた。声に興味を持ったサロメは衛兵を誘惑し、井戸の戸を開かせヨハネを誘うが彼は王と妃を非難する言葉だけを発し続け、サロメには目もくれない。それに腹を立てたサロメはヘロデ王に踊りの褒美としてヨハネの首を望んだ。ヘロデは思い留まるように言うが彼女は譲らず、ついにヨハネの首が銀の皿の上にせられサロメの前に置かれた。サロメはヨハネの首を持ち上げ、くちづけをする。その有様を見ていたヘロデ王は兵士達にサロメを殺すように命じた。

サロメはワイルドが戯曲『サロメ』に描く以前から様々な絵画や物語のモチーフとして使われていた。井村君江^{四〇}によると、サロメはもともと聖書の一挿話として、「洗礼者ヨハネの生涯」連作図の最後の場面にただ副次的に登場するのみであった。それが、ルネッサンス期には絵画の中で華やかに踊る姿が描かれるようになり、十九世紀末モローやクリムトによって主役として描かれるように変化していった。その中でも、第一節でも触れたように、ベルナルディー

ノ・ルーニーの絵画『サロメ』(一八七二年)がゴーチエに(«*emme fatale*»)と表現されたことが(「宿命の女」)の始まりであり、サロメと(「宿命の女」)の間には切っても切り離せない関係があることがわかる。しかし、日本においてサロメという女性が広がった媒体は絵画ではなく、ワイルドの戯曲が中心であった。当時『サロメ』の日本での受容は一九〇七年に森鴎外が「脚本「サロメ」の略筋」という表題で『歌舞伎』の八十八号に『サロメ』の批評と紹介をしたことからはじまった。一九〇九年には小林愛雄が『サロメ』を翻訳し、鴎外も僅かに遅れて同じ年に翻訳を行っている。鴎外訳は一九一五年下山京子によって上演もされ、人々に知られることとなった。『サロメ』が日本に紹介されるやいなや次々と翻訳や舞台の上演がなされた。菊池も文学者を志望する若者に推薦する外国文学の一冊として一九三六年の文の中で『サロメ』を挙げている。

文学志望の人たちから、先づどんな書物を読めばいいかといふことをよく訊かれる。中学を出た位の人で、これから文藝を味はつて行かうとする人を標準として、読むべき書物を書き上げて見度いと思ふ。文学入門の書籍と云つてもいい。文芸を味はうとする人、小説でも作らうとする人は、先づこの位の本は読む必要があるかも知れないと思ふ。心付くままに挙げたのであるから、標準にはムラがあるかも知れない。(略)

外国では、(翻訳のあるもの)だけで云ふ

一、聖書 心を養ふ上からも又外国の文学(此頃では日本の文学にも)無数の材料を供給してゐる点から。

一、アラビヤ夜話 外国的な奔放な空想、面白い説話の本として。

一、ギリシヤ神話 外国の文学に多くの材料を供給して居る点及び話の面白い点で。

一、沙翁の戯曲 日本では非常に有名だから、ハムレットやマクベスなどを読んで置いたらいい。

現代のものでは、

一、英国 是非読まなければならぬものはないが、ワイルドやシヨオのものは、一二篇讀んでもいい。殊にワイルドのサロメなど。四一

『サロメ』は文学を生業とするものにとつては読んでおいた方が良い作品とまで述べられている。ワイルドの『サロメ』は当時、文学として読まれるだけでなく、実際に上演されており、多くの人がこれを見ていた。芥川も一高時代に『サロメ』を観劇しており、その感想を後に振り返っている。

これは僕等の十四五年前に見た最初の「サロメ」の印象である。同時に又日本の舞台に上つた最初の「サロメ」の印象である。僕は後に松井須磨子のやはり「サロメ」を演ずるのを見た。須磨子のサロメは美しい―よりも兎に角若かつたのに違ひない。が、僕のいつになつても忘れることの出来ないのはあの年をとつたサロメである。あの横浜へ流れて来た無名の英吉利の女優である。……四一

芥川は一高の友人四人とともに一九一二年アラン・ウィルキー一座によって横浜のゲイティ座で上演された『サロメ』と『フロレンタインの悲劇』を観劇した。この四人の友人というのは小山内薫、佐々木信綱、大仏次郎、島村抱月のことで菊池は含まれていないが、一高時代に菊池の周辺で話題となっていたワイルドの作品は『サロメ』であつたことが分かる。当然「青年期の情熱」をワイルドに傾けていた菊池も参照していただろう。『真珠夫人』に直接サロメという〈宿命の女〉が瑠璃子に用いられることはないが、『サロメ』を描いたオスカー・ワイルドが瑠璃子の発言の中に登場することは注目すべきことであろう。

これまで見た瑠璃子とユーディット、カルメンの重なりや〈宿命の女〉を描いた代表的な作家であるワイルドが出されていることから瑠璃子に〈宿命の女〉イメージが認められることは明瞭である。次章では、〈宿命の女〉である瑠璃子がどのような主張を行っているのか検討し、論争を文脈として踏まえることによって分析していく。

三 瑠璃子における性規範

第一章で確認したようにこれまでに瑠璃子は「新しい女」概念との関わりが論じられてきた。「新しい女」という言葉自体は明治時代には日本に存在していたがこの言葉が流行したのは一九一一年に平塚らいてうが『青鞥』を創刊してからのことだった。『青鞥』は日本初の女流文芸雑誌で女流文学の発達を目的として創刊されたが、次第に論調は旧道德打破の啓蒙運動に向かい「新しい女」の出現に注目が集まった。『真珠夫人』の連載はこの『青鞥』創刊の十年ほど後の

ことであつた。

この「新しい女」という概念は『真珠夫人』と深く関わるものとして注目されてきた。しかし、「新しい女」概念を見る上で、歴史的には外すことのできない様々な論争と『真珠夫人』の関わりについては検討されてこなかった。この論争は「新しい女」概念により展開されていったものであり、当時の「新しい女」を検討する上で重要である。そこで本章では『青鞥』創刊よりも『真珠夫人』執筆時により近い時期に起こった「新しい女」に関連する論争から当時における最新の女性像を検討し、それにかかわっていると見られる『真珠夫人』の内容を分析していく。

三―一 貞操論争・母性保護論争

貞操論争は生田花世が雑誌『反響』に発表した「食べることゝ貞操と四三」という文章の中で、弟を養いつつ生活して行くために自らの貞操を犠牲にしたことを告白し、それを安田皐月が「生きる」と貞操と―反響九月号「食べる事と貞操と」を読んで^{四四}において激しく非難したことから始まった。安田の非難を受けて花世は「周囲を愛することと童貞の価値と―青鞥十二月号安田皐月様の非難について^{四五}」の中で自己の貧困の実情と安田への非難を書き、安田もまたこれに応えるという形で論争は白熱して行つた。この論争は一九一四年八月から一九一六年十月まで続いたが、その間に生田花世と安田皐月の間の論争だったものが伊藤野枝や平塚らいてう、与謝野晶子などを巻き込んで大きく広がっていった。

貞操の問題は『真珠夫人』研究の中でも第一章で見た通り川端康

成が「処女を守り通し、読者に同情を求めた点で瑠璃子は新しい女としては不徹底」であると指摘したことから瑠璃子の新しさを議論する上で主要な点とされてきた。この貞操論争の渦中で伊藤野枝が「貞操についての雑感^{四六}」でこのようなことを述べている。

最も不都合な事は男子の貞操をとがめずに婦人のみをとがめる事である。これは最も夫人の人格を無視した道徳であると思ふ。男子の再婚或は三婚四婚は何の問題にもならぬが夫人の相当の人達は再婚は直ぐと問題になる、これは何と云ふ不公平な事であらう。男子に貞操が無用ならば女子にも同じく無用でなくてはならない。

この伊藤の発言は『真珠夫人』の「彼女の云文」の第四節に描かれている瑠璃子の発言と重なるところがある。

男性は女性を弄んでよいもの、女性は男性を弄んでは悪いもの、そんな間違つた男性本位の道徳に、妾は一身を賭しても、反抗したいと思つてゐますの。今の世の中では、国家までが、国家の法律までが、社会のいろ／＼な組織までが、さうした間違つた考へ方を、助けてゐるのでございませうもの。御覧なさい！世の中には、お女郎屋だとか待合だとかお茶屋だとか、男性が女性を公然と弄ぶ機関が存在してゐるのですもの。さう云ふものを国家が許し、法律が認めてゐるのですもの。また、さう云ふものが存在してゐる世の中に、住みながら、教育家とか思想家など云ふ人達が、晏然として手を拱いてゐるのですもの。

女性ばかりに、貞淑であれ！ 節操を守れ！ 男性を弄ぶな！ そんなことを、幾何口を酸くして説いても、妾はそれを男性の得手勝手だと思ひますの。

『真珠夫人』本文「彼女の云文」第四節より）

伊藤野枝の発言は女性の再婚について述べたものであり、金権で女性を好きにしようとすることに對する批判をしている瑠璃子と話題自体はずれている。しかし貞操という観念は男女平等であるべきだという二人の主張が共通していることは認められるだろう。瑠璃子が当時耳目を引いたこの論争の中で唱えられた思想を自身の状況とは離れた問題であるにもかかわらず唱えていることから、彼女が貞操論争問題のような議論を念頭に置いて語っていることが窺える。

また、先に引いた「女性ばかりに、貞淑であれ！ 節操を守れ！ 男性を弄ぶな！ そんなことを、幾何口を酸くして説いても、妾はそれを男性の得手勝手だと思ひますの」という発言に注目してみると、瑠璃子は「貞淑」と「節操」、女性が「男性を弄ぶ」という三つの事柄を並列させ、自身の主張として発言しているが、この並列されている三つの事項は全てが瑠璃子自身の行いに基づく主張ではない。瑠璃子は第三章で取り扱った通り男性を弄び、多くの場面で視点人物となつてゐる渥美信一郎からも非難されるような振る舞いをしてゐる。しかし、異性との性的接触だけから見ると、「貞淑」や「節操」という点において瑠璃子は他から非難されるような行いはしていない。彼女は多くの男性に気のある振りをして「弄」んではいるが、身体的な面においては物語の最後に亡くなるまで純潔であり続けている。女性にばかり「貞淑」を求めることを非難してい

るが、彼女自身は純潔を守り続けているのだ。このことから瑠璃子は本来自身が破つてはいない規範の議論にまで射程を広げて発言していることが読み取れる。瑠璃子自身は貞操を守っているが、その発言の中で女性にばかり貞操を求める価値観に一石を投じている。

瑠璃子の人物造型を考える上で、大正期に起こった重要な論争である母性保護論争にも触れておきたい。母性保護論争は一九一八年三月から十九年の六月まで続いた論争で、『婦人公論』『太陽』などの誌上でやりとりされたため、当時多くの人目に触れることとなった。この論争は、『真珠夫人』が連載開始される一年前に終了したばかりであり、最新の事項を多く取り入れる傾向のある新聞連載小説としての本作を考察する上で重要である。論争の中心となった与謝野晶子は女性を徹底して独立すべきであり、依頼主義は女性自ら差別を招くこととなると主張した。それに対して平塚らいてうは、母となることで女性は社会全体に貢献する事が出来るため、母の保護は当然の権利であると反論した。山川菊枝は両者の意見を認めつつ、現在の資本主義の改革をしなければ母の保護はなしえない、という社会主義的な主張を行った。

この三者の主張に瑠璃子をあてはめて考えて見ると、経済的に瑠璃子が独立しているとはいえ、勝平の残した財産により義理の娘である美奈子を養育しながら生計を立てている点において、女性の徹底した自活を求める晶子よりもやや平塚らいてうの主張によっているように思われる。しかし、瑠璃子の特殊性として、この三者に共通している「女性は搾取されるものである」という被害意識に留まらないということが挙げられる。極端に言えば母性保護論争の焦点

は男性に頼るか頼らないかという点になるが、瑠璃子は積極的に「女」を使って勝平を誘惑し勝平の経済力を利用していた。菊池は母性保護論争を受けて「男から搾取する女」という論争の中では触れられてなかった新しい女性像として瑠璃子を描いたのではないだろうか。

三二 男子の貞操

第一節では、当時起こった貞操論争と母性保護論争から女性の性規範について考察した。第二節では、大正期の男性、特に男子学生における貞操観について確認した上で、瑠璃子と青木兄弟のかかわりから瑠璃子における「新しさ」について考察する。

大正期の男子学生における貞操観については渋谷知美^{四七}が詳しく分析している。渋谷は、前近代までは童貞を馬鹿にする風潮があったが、一九二〇年代に入ると学生を中心に結婚する際、妻に処女を望むならば自身も童貞であるべきだという積極的な童貞主義「童貞美德論」というものが登場したと論じている。渋谷はこの「童貞美德論」を「新妻にささげる贈り物」としての童貞として捉え、女性が結婚するまで処女であることに拘る点において保守的であるが、当時の時代背景に照らし合わせて見れば彼等の「男子の貞操」に価値があるという考えは非常に新しいものだったと評している。菊池も『真珠夫人』の連載時期とは異なるが、「良人の貞操は、妻にとつて万金のダイヤよりも尊いのである^{四八}」と発言しており、一九二〇年代の男子学生たちと同様に妻にとつての男性の貞操の価値を認める発言をしている。

この「新妻にささげる贈り物」としての童貞という考えは、大正時代の男女平等問題を取り扱う中で男性に焦点をあてている。『真珠夫人』において、男女平等問題を男性の目線で考える場合、必要となるのは肉体の貞操ではなく、精神的な純情という視点である。

瑠璃子はカルメンやヘッペル版のユーディットなどとは異なり、肉体関係を持たず、男性を精神的に破壊させていくタイプの「宿命の女」である。男性を弄ぶという瑠璃子の行為は、彼女からすれば女性に不平等な社会への反抗という正当な行為である。しかし、純情な青木兄弟にすれば瑠璃子によって精神的な純情を弄ばれたことになる。本作の冒頭で亡くなる青木敦は手記の中で瑠璃子についてこのように記述している。

何うしても、彼女の面影が忘れられない。それが蝮のやうに、

自分の心を噛み裂く。彼女を心から憎みながら、しかも片時も忘れることが出来ない。彼女が彼女のサロンで多くの異性に取囲まれながら、あの悩ましき媚態を惜しげもなく、示してゐるかと思ふと、自分の心は、夜の如く暗くなつてしまふ。自分が彼女を忘れるためには、彼女の存在を無くするか、自分の存在を無くするか、二つに一つだと思ふ。(略)

さうだ、いつそ死んでやらうかしら。純真な男性の感情を弄ぶことが、どんなに危険であるかを、彼女に思ひ知らせてやるために。さうだ。自分の真実の血で、彼女の偽の贈物を、真赤に染めてやるのだ。そして、彼女の僅に残っている良心を、恥しめてやるのだ。

『真珠夫人』本文「女王蜘蛛」第七節より

敦の弟である稔が渥美から瑠璃子の正体を聞かされる場面ではこんな描写がされている。

彼の忠告は間に合つただらうか。いな、彼の忠告は、後の祭だつた。一時間だけ、遅れ過ぎた。

彼の忠告は、災禍の火を未然に消す風とならずして、却つてその火を煽り立てた。彼が、夫人の危険を説いたときに、青年はもう、夫人から弄ばれてゐたのだ。否、弄ばれたと思つてゐたのだ。夫人から、弄ばれた恨と憤とに、燃えてゐた青年の心を、彼はいやが上に煽つた。

『真珠夫人』本文「火を煽る者」第六節より

純真な二人の青年は瑠璃子によつて弄ばれ、苦しめられている。

彼らは身体的には失つたものは何も無いが、瑠璃子によつて確かに精神の純情を奪われ、それぞれ破壊へと向かつていく。この純情の喪失という問題は渋谷の述べる男子の童貞の問題そのものではないが、密接に関わる問題である。なぜなら「新妻に捧げる贈り物」としての童貞というものには、肉体の問題だけでなく、男子学生の中に現れた男女平等の思想とロマンチズムによる精神の問題が関係しているからである。そしてこの男性の純情という問題が『真珠夫人』の中では肉体の問題とならぶ形で現れている。

瑠璃子の発言には当時耳目を引いた性にまつわる論争への関わりがみられた。一つ目は貞操論争である。この論争の最中に発表した伊藤野枝の主張と瑠璃子の発言は、貞操という観念は男女平等であ

るべきだという点で内容が共通していることが確認された。先行研究において貞操の問題は、瑠璃子の「新しさ」を否定する根拠となってきた。川端は瑠璃子が処女を守り通す点で「新しい女」としては不十分だと指摘していた。確かに彼女は最後まで処女であり続ける。しかし、それは旧道徳に縛られていたわけではなく、むしろ処女であることを自身の武器として男性に対抗していたのだ。瑠璃子はあえて媚態を見せながらも体を与えないことによって、勝平の中での自身の価値を高めていた。処女であることを武器に男性を誘惑し、男性中心の不平等な社会を非難していたのだ。川端や当時の『真珠夫人』の読者は、瑠璃子が処女であることに安心していたのではないだろうか。この安心感が瑠璃子の「新しさ」を否定してきたのだろうが、本当に彼女は男性にとって安心できる女性だったか。瑠璃子は身体的には処女であつても十分過激な行為を繰り返している。男性を性的魅力で誘惑し、処女であることを利用するという手法は身体の貞操にばかり捉われていた当時としては逆転の発想であり、瑠璃子が旧来の道徳に縛られているとは到底言えないだろう。

二つ目に母性保護論争との関わりがみられた。美奈子を養育しながら勝平の財産で生活する瑠璃子の姿からは母性保護論争における平塚らいてうの母性保護の主張に沿っているように思われ、しかも、瑠璃子は、当時の女性にあつた「女は搾取されるものである」という被害者意識を抜け出し、積極的に「女」を使って「男から搾取する女」という新しい女性像を獲得していた。この瑠璃子にみられる新しい女性像には第二章の〈宿命の女〉モチーフが重なる。母性保護論争ではとり着けなかった新しい女性像が、〈宿命の女〉を瑠璃子に描くことで表れているのだ。また本作は、女性の貞操にばかり

価値を置いていた時代に、男性の純情の問題を作品の中に取り上げ、身体だけではなく精神の純潔にまで言及する非常に革新的な作品であつた。『真珠夫人』が多くの人に読まれる大ヒット作品となつたことで、この男性の純情の問題は広がっていき、渋谷の論じる大正期に急浮上する男性の童貞にも価値を与える動きの先駆けとなつたと言えるだろう。

『真珠夫人』は大正期のベスト・セラー小説である。これまで新聞をあまり購読していなかった婦人層などにも本作は読者を広げ、何度も劇化・映像化されてきた。本作のヒロイン・瑠璃子には、フリードリヒ・ヘッペルのユードイット、メリメのカルメン、そしてサロメを書いたオスカー・ワイルドのモチーフが使われており、彼女には〈宿命の女〉性が認められた。女性が現代よりも不利な立場に置かれていた当時の社会において、女性が男性を自身の魅力によって破壊へ導く〈宿命の女〉という存在は、男女平等の問題においてこれまでの日本では見られなかった革新的な女性像であつた。瑠璃子が漱石や谷崎の作品に登場する〈宿命の女〉と比べて、俗的で幻想的なイメージの〈宿命の女〉と結びつかなかったことからは、彼女の内面を描くことで瑠璃子自身の主張を読者に読ませ、女性の新しい生き方から当時の不平等な社会に一石を投じようとした「生活第一、芸術第二」を信条とした菊池寛の〈宿命の女〉をみるこ

て出来る。

本作は時事的な問題を取り入れる傾向の強い新聞連載小説として書かれており、そのために広い読者層が講読した。『真珠夫人』が当時話題となつた様々な議論を発展させ、読者に伝えたことで渋谷の論にあるような新たな性に関する思考を起動させていく契機となつ

た。本作はその点において、強い影響力を持った作品だったと言えるだろう。

- 一 松岡譲『現代通俗小説論』（『東京朝日新聞』一九七二・四）
- 二 青野季吉・伊藤整・中野好夫「創作合評会」（一）『群像』一九四七・四
- 三 前田愛「大正後期通俗小説の展開（上）―婦人雑誌の読者層―」（『文学』一九六八・六）
- 四 川端康成「真珠夫人」など（『菊池寛全集 第五卷』一九六〇・十二）
- 五 駒沢喜美「男権への反逆者―真珠夫人―の瑠璃子」（『国文学 解釈と教材の研究』一九八〇・三）
- 六 西垣勤「菊池寛『真珠夫人』の瑠璃子」（『国文学 解釈と教材の研究』一九八〇・三）
- 七 陳月吾・唐麗燕「菊池寛の『真珠夫人』の中に登場する新たな女性像について」（『福井工業大学研究紀要第二部』二〇〇六・三）
- 八 渡辺義愛「宿命の女」（『集英社世界文学辞典』集英社、二〇〇二・二）
- 九 カール・ウッドリンク「若島正訳『宿命の女』『幻想文学大事典』（国書刊行会、一九九二・二）
- 一〇 マリオ・ブラッツ『肉体と死と悪魔』（国書刊行会、一九八六・十一）
- 一一 平石典子「明治東京の『宿命の女』」（『文藝言語研究 文芸篇』二〇〇七、一・九）など
- 一二 平石典子「明治東京の『宿命の女』」（『文藝言語研究 文芸篇』二〇〇七、一・九）など
- 一三 平石典子「明治東京の『宿命の女』」（『文藝言語研究 文芸篇』二〇〇七、一・九）など
- 一四 「画の寓意・画の象徴―三四郎―を読み直す」（『聖徳大学研究紀要』一九九八・十二、今井洋子「漱石とコルタサル作品の女性像について―宿命の女たち―はなぜ殺されたのか」（『京都産業大学論集』二〇〇六・三）など
- 一五 笠原伸夫『谷崎潤一郎―宿命のエロス』（冬樹社、一九八〇・六）
- 一六 芥川龍之介「菊池寛全集」の序（『菊池寛全集 第三卷』春陽堂、一九二二・四）

- 一七 正宗白鳥「菊池寛論その他」（『中央公論』一九三二・四）
- 一八 菊池寛「文芸作品の内容的価値」（『新潮』一九二二・七）
- 一九 菊池寛「漱石、潤一郎の芸術」（『菊池寛全集 補巻』武蔵野書房、一九九二・二）
- 二〇 旧約聖書外伝「ユディット」に登場する女性。
- 二一 ブリスベル・メリメの小説「カルメン」に登場する女性。
- 二二 オスカー・ワイルドの戯曲「サロメ」に登場する女性。
- 二三 土岐健治「聖書外典偽典第一巻 旧外典Ⅰ」（教文館、一九七五・四）を参考にした。
- 二四 カール・ウッドリンク（若島正訳）『宿命の女』（『幻想文学大事典』（国書刊行会、一九九二・二）
- 二五 川上美奈子「菊池寛『真珠夫人』―大正期ベストセラー小説のジェンダー・イデオロギ―江種満子・井上理恵「二十世紀のベストセラーを読み解く―女性・読者・社会の二〇〇年」（『学芸書林』二〇〇一・三）
- 二六 芥川龍之介「大正八年度文藝界」（『毎日年鑑』（大阪毎日新聞社・東京日新聞社、一九一九・十二）
- 二七 無署名「大正六年史文藝界」（『万朝報』一九一八・一・一）
- 二八 菊池寛「雑書を渉猟す」（『文章倶楽部』一九二〇・六）
- 二九 一九一四年六月三日『朝日新聞』朝刊一面に吹田訳「ユディット」の広告が掲載されている。
- 三〇 月旦子「読むがまゝ」（『一』弥生月の文壇）（『時事新報』一九一三・三・十八）
- 三一 無署名「大正六年史文藝界」（『万朝報』一九一八・一・一）
- 三二 例えは生田長江訳には、岩野泡鳴「十月の雑誌から」（『時事新報』一九一九・一）などの同時代評がある。
- 三三 一九一九年四月二十日の『朝日新聞』朝刊五面や一九二〇年二月二日の『朝日新聞』朝刊一面などに広告が掲載されている。
- 三四 小林幹也「誰の視点で眺めるか―菊池寛『真珠夫人』の視点人物―」（『文学・芸術・文化』二〇〇七・三）
- 三五 鹿島茂「悪女入門 フラム・フアタル恋愛論」（講談社現代新書、二〇〇三・六）
- 三六 菊池寛「自分に影響した外国作家」（『テアトル』一九二六・五）
- 三七 片山宏行「菊池寛の軌跡（初期文学精神の展開）」（和泉書院、一九九七・九）

- 三八 菊池が参照した『ドリアン・グレイの肖像』と同じ作であるが、後に矢口達によって『ドリアン・グレイの画像』（一九二〇年）と訳された。
- 三九 菊池が一高の友人佐野文夫の窃盗の罪を被って退学したという出来事。卒業三ヶ月前のことだった。
- 四〇 井村君江『サロメ』の変容―翻訳・舞台』（新書館、一九九〇・四）
- 四一 菊池寛『文学読本』（第一書房、一九三六・五）
- 四二 芥川龍之介『サロメ』（『女性』一九二五・八）
- 四三 生田花世「食べることと貞操と」『反響』一九一四・八
- 四四 安田皐月「生きる」と貞操と―反響九月号「食べることと貞操と」を読んで―『青鞥』一九一四年十二月）
- 四五 生田花世「周囲を愛することと童貞の価値と―青鞥十二月号安田皐月様の非難について」『反響』一九一五・十二）
- 四六 伊藤野枝「貞操についての雑感」『青鞥』一九一五・二）
- 四七 渋谷知美『日本の童貞』 文藝春秋、二〇〇三・五）と渋谷知美『立身出世と下半身』（洛北出版、二〇一三・三）を参考にした
- 四八 菊池寛「現代良人読本」（『主婦之友』一九三七・十一）―一九三八・四）